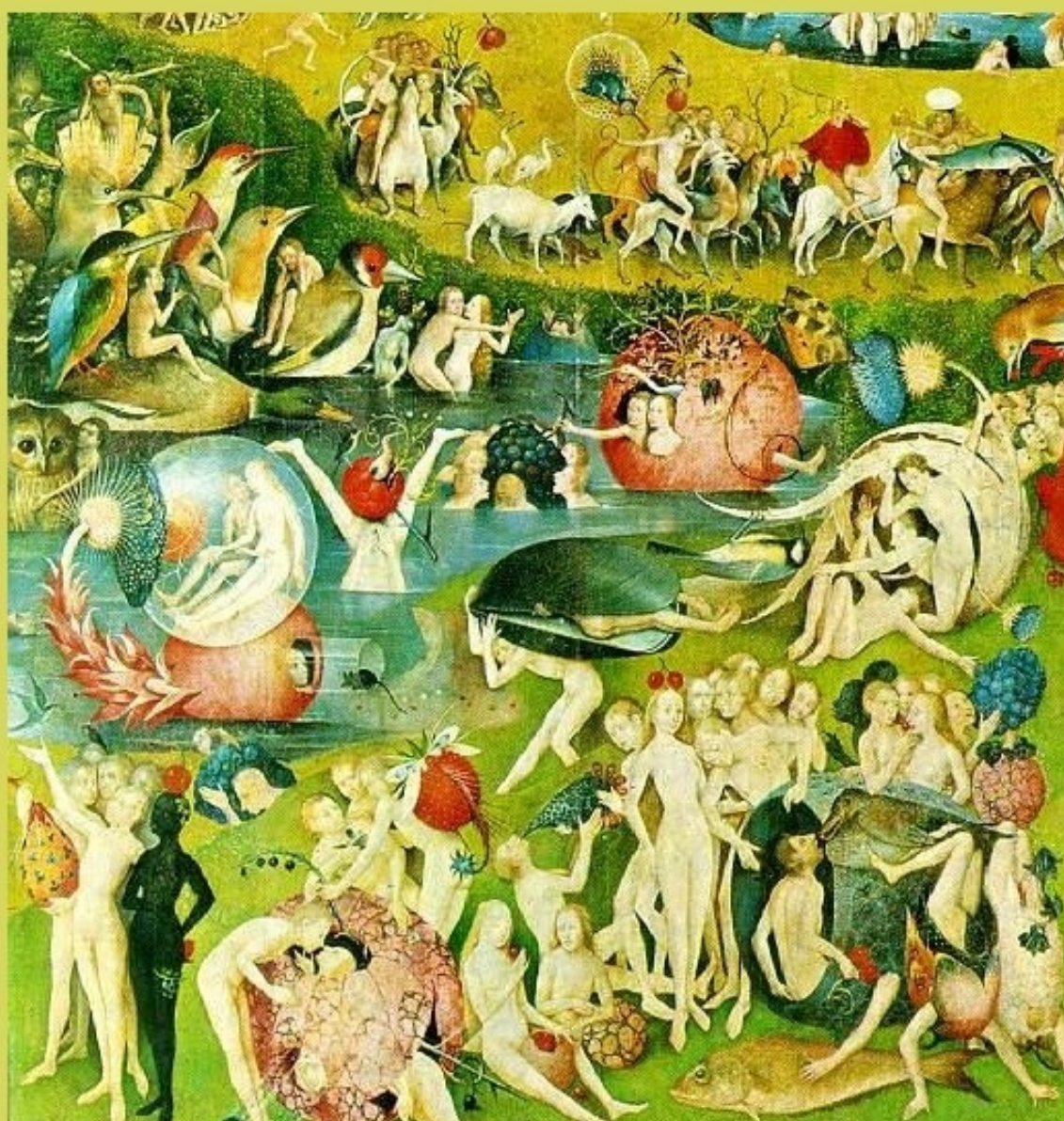


# 黄金の泉

ラフカディオ・ハーン



# 黄金の泉

## 黄金の泉

ラフカディオ・ハーン 作

(これはとある夏の夜の払暁(あかつき)に、オテル・デュー(Hotel Dieu 市立病院)において、スペイン語圏アメリカから来た流浪の老人が、スペイン人老司祭に語った物語です。私はこれを、ほぼ老司祭の口から聞いたままに記しています。)

「わしは眠れませんでした。嗅いだこともない花の匂いがしていましたし、新しい土地へ来て、わくわくする気持が、頭をさえさせていました。空には見たこともない星座が輝いています。この新世界は、わしには、エデンの園そのものに思われました。たぶんそんなことが合わさって、わしは熱病にでもうかされたように、うわついた気分になりました。わしは起き上がって、星空のもとを出歩きました。兵士たちの重い寝息が聞こえました。鋼鉄(はがね)の胸当てが、うす明かりの中に燦(きらめ)きました。時々、馬が鼻を鳴らし、見張り役の兵たちの、規則的な足音がしました。向こうの深い森を見ていると、一人でその中に彷徨っていきたいという、わけのわからない渴望が起こってきました。セヴィリアにいた頃、夏のことでしたが、髯面の兵士たちから、魔法の国のような新世界の話聞いたときにも、そんな渴望が起こりました。危険などは考えもしませんでした。なにしろ、あの頃のわしは、神も悪魔も恐れませんでしたので。部隊長はわしのことを、あの向こうみずな部隊の中で、一番の向こうみずと見ておりましたな。わしは陣を越えて出ました。胡麻塩頭の歩哨は、彼の挨拶をわしが不機嫌に無視すると、唸るように乱暴に咎めました。わしは彼をののしって、陣の外へどンドン歩いてゆきました。

あの南方の、素晴らしい夜空の深い青色が、薄紫へと薄らいでゆきました。そして地平線は、椰子の木の梢の後ろで、黄色く明るんでゆきました。最後に、金剛石のきらめきのような南十字星が、消えてゆきました。はるか背後で、スペイン兵の吹く召集ラッパが鳴りひびいて、熱帯の朝のかぐわしい大気を、伝わってきました。それは別世界から聞こえる音楽のように、遠く、かすかに、甘美に、震えていました。しかし、わしは引きかえそうなどとは、まるで思いませんでした。夢でも見ているように、わしは、同じ不思議な衝動に駆られて、進みつづけました。ラッパの呼び声は、前よりも弱々しく、もう一度鳴りました。異国の花の異様な芳香のせいでしたか、香料を実らせる木々の香りのせいでしたか、熱帯の空気のまといつくような暖かさのせいでしたか、あるいは魔法であったのか、いずれにしても、これまで知らなかった感情が、わしをとらえていました。わしは泣けるものならば、泣いてみたかった。わしは、これまでの獰猛な気性が、わしの心から消えていくのを感じたのです。野生の鳩が木から飛んできて、わしの肩に止まりました。わしは自分が鳩をなでているのに気づいて、笑ってしまいました。血で赤く染まった手と、罪で黒く塗られた心の持ち主である、このわしがそんなことをするとは。

日の光が広がり、明るみが増して、緑と黄金の楽園が現われました。蜜蜂ほどの大きさの、不思議な、金属的にきらめく色彩の鳥が、まわりで唸っていました。鸚鵡が木でやかましく鳴きたてました。猿どもが、枝から枝へと、めざましく敏捷に、伝ってゆきました。言葉に表わせないほど美しい、無慮無数の花が、シルクの花芯を陽に向けて開きました。夢の中のような森の、眠りを誘う香りが、わしをますます酔いしれた気分になせました。そこは、わしには魔法の土地のように思われました。スペインにいた頃、ムーア(\*1)たちが、日の出る辺りにある国々の噂話に語ったような、そんな魔法の土地に思われたのです。そのせいでしたらうか、わしはいつのまにか、ポンセ・デ・レオン(\*2)の探した黄金の泉について、夢のようなことを考えていました。

すると、思いなしか、木々がぐんと背伸びしたように見えました。椰子の木は大洪水以前にさかのぼるほど古く見え、インディアンの羽飾りのような樹冠は、書空に届くかと思われるほどで

した。ふいにわしは、ひろびろした空き地に自分がいるのに気づきました。そこはとてつもなく高い太古の木々によってとりまかれており、円い空き地全体は、緑の影につつまれていました。地面は苔と、香りの良い草や花が、一面に厚く生い茂っていて、その柔らかな葉や花弁を足で踏んでも、音がしませんでした。そして木々の円形の囲みのどの方面からも、地面が傾斜していて、その先には、キラキラする水をたたえた巨大な水盤がありました。その水盤の真中には、以前にグラナダのムーアの宮殿で見たことのあるような、噴水がそびえていました。水盤の水は、恋をおぼえ始めた女の瞳のように深く、澄んでいました。ずっと底の方には、金のつぶの散らばった砂が見え、噴水の雨がおちて波紋を描いたところは、虹色に見えました。不思議なことに、その噴水は、人の手になったものから噴きだしているのではありませんでした。それはあたかも、底の力強い水流が、水盤の輝く水面の上方に、水を噴き上げさせているかのようでした。わしは甲冑をはずし、服を脱いで、喜び勇んで、その泉に飛びこみました。思ったよりも、ずっと水の深さがありました。水晶のように透きとおっていたので、だまされたのです。底にもぐりつくこともできませんでした。わしは噴水のところまで泳ぎました。そして驚いたことに、水盤の水は山の泉水のように冷ややかなのに、中央にある生きた水晶のような噴水の柱は、血の温かさを持っていました！

わしはこの奇妙な水浴びで、言うに言われぬ気持のたかぶりを覚えました。わしは水の中で少年のようにはしゃぎました。わしは森に向かって、鳥たちに向かって、大声で叫びさえました。鸚鵡たちが椰子の木のとっぺんから、わしの叫びをまねて、叫び返しました。そして、泉から出た後も、わしは疲れも、空腹も、覚えませんでした。しかし横になると、深い、のしかかるような眠りに襲われました。子供が、母親の腕の中で眠るような眠りでした。

目を覚ますと、一人の女がわしの上にかがんでいました。彼女は一物も身につけていませんでした。非の打ちどころのない美しさと、その肌の熱帯の色とで、彼女は琥珀でできた像のように見えました。彼女の流れるような黒髪には、白い花々が編みこまれ、彼女の大きな両眼は、奥深い黒色をしていて、絹のような睫毛に縁どられていました。彼女は、わしがこれまでに見たインディアン若いの女のように、金の飾り物をつけたりはしていませんでした。ただ、髪に白い花をつけただけでした。わしは天使でも見るかのように、賛嘆しながら彼女を見ていました。背の高い、ほっそりと、優美な姿は、まるでこの世のものとは思われませんでした。わしの罪深い全人生を通じて、初めてのことでしたが、わしは女を前にして、畏れを覚えました。とはいえ、その畏れには、歓びも混じっていないわけではありませんでした。わしはスペイン語で彼女に話しかけました。しかし彼女は黒い眼を更に大きくして、微笑するだけでした。わしは身振りでも伝えました。彼女は果物と瓢箪の椀に入れた澄んだ水を、わしのところへ持ってきました。彼女がもう一度わしの上にかがんだ時、わしは彼女に接吻しました。

わしらの愛の生活について、語らねばならないでしょうか、神父さま。それはよしにして、ただその年月が、わしの人生にとって、一番幸せな時だったとだけ言っておきましょう。あの不思議な土地では、天と地が抱擁しているように思われました。あれはエデンでした。楽園でした。決して飽きることのない愛、永遠の若さがありました！ほかのどんな人間も、わしの味わった幸福を味わいはしなかったでしょう。けれども、またどんな人間も、これほどの喪失の苦しみを受けるはしなかったでしょう。わしらは果物を食べ、泉の水を飲んで暮らしていました。わしらの寝所は苔と花でした。山鳩がわしらの遊び相手、星々がわしらの灯火でした。嵐も雲もなく、雨も暑さもなく、かぐわしい匂いと、鳥たちのさえずりと、水をつぶやきとで、眠気を誘われる、なまぬるい常夏でした。椰子の木が揺れ、森の宝石をちりばめたような胸の歌鳥が、一晚中歌いました。わしらはその小さな谷を、一度も離れませんでした。わしの甲冑も、わしの上等な剣も、錆びついてゆき、わしの服も、まもなくすり切れてゆきました。しかし、そこでは服などいらなかったのでした。いつでも暖かく、光あふれ、穏やかでした。“私たちは、ここでは決して年をとりません”と彼女は囁きました。しかし、これは本当に若返りの泉なのか、とわしが尋ねると、彼女はただ微笑して、指をその唇に当てました。彼女の名前さえも、わしは知ることができないのでした。彼女のしゃべる言葉も学べませんでした。ところが、彼女の方はわしのしゃべる言葉を、驚くほどすばやく学びました。わしらは一度も、いさかいなどを起こしませんでした。わしは彼女に対して、不機嫌な顔をすることでさえ、はばかったのです。彼女は、いつでも優しく、陽気で、愛らしかったのです。――しかし、こんなことをお聞かせしても、しかたありません、神父さま。



わしらの幸福は非の打ちどころのないものでした、とまで申すつもりはありません。そうではなかったのです。一つだけ奇妙な不安の種があって、それがたえずわしを悩ませたのでした。毎晩、彼女の腕の中で寝ていると、スペイン兵のラッパの音（ね）が聞こえたのです。それは死人の声のように、遠くから、かすかに、不気味に響いてきました。それはわしに呼びかけている、陰鬱な声に聞こえました。そしてその音が、わしらのところへ漂ってくるたびに、彼女は震えて、その腕をわしの体に、いっそう強く巻きつけるのが感じられました。そして、わしが接吻をして彼女の涙をとめるまで、泣きつづけるのでした。あの年月を通して、わしはラッパの音を聞きました。年月と申しましたか？ いいえ、数世紀と言ってよいでしょう！ なにしろ、あの土地では決して年をとらないのですから。わしの仲間たちがみな死んでしまった後も、わしは数世紀にわたって、ラッパの音を聞きつづけたのです。

（司祭は灯火の下で十字を切り、祈りの言葉を呟きました。「つづけなされ、あなた（hijo mio）」と、しばらくして言いました。「すべてをお話しなされよ」）

わしは腹立たしかったのです、神父さま。わしは、わしの生活を悩ませたあの音が、どこからやってくるのか、自分で確かめたいと思ったのです。その晩、どういうわけか、彼女はとても深く眠りこんでいました。彼女に接吻しようと、かがみこんだ時、彼女は夢の中で呻きました。彼女の黒い睫毛の上には、ひと粒の澄んだ涙が煌（きらめ）いていました。すると、その時、あのいまわしいラッパの音が起こったのです――

老人の声は、いっ時途切れしました。弱々しい咳をして、血を吐いてから、彼はつづけました。

「これ以上話す時間が、わしにはほとんどありません、神父さま。わしは二度と、あの谷へ帰る道を見つけられませんでした。わしは彼女を永遠に失ったのです。人の世界をさまよってみると、わしの話せない言葉を、彼らは話していました。世界は変わっていました。やっとスペイン人に出会った時、彼らの話す言葉は、わしの若い頃聞いたものとは違っていました。わしの体験を話す勇気などは、ありませんでした。わしは狂人の仲間入りをさせられたことでしょうか。わしは古い世紀のスペイン語を話します。わしの同国民は、わしのしゃべり方が変だと馬鹿にします。あなた方の新しい世界で、わしが長く生活していたならば、わしの考え方や、振る舞いやが、今のものとは違うので、わしは狂人扱いされたことでしょうか。しかし、わしはそうしませんでした。熱帯の沼沢地で、ニシキヘビやワニと暮らし、人の踏み入らない森の奥や、名もない川の岸辺や、滅亡したインディアンの都市の廃墟で暮らしてきました。そして彼女を探し求めるうちに、わしの力は衰え、わしの髪は真っ白になりました。」

「あなた」と老司祭は叫びました。「そんな悪しき思いは棄てさりなさい。あなたのお話は聞きとりましたが、司祭でもなければ、誰もがあなたを狂っていると見なすでしょう。あなたが私に語ったことは、私はすべて本当だと思います。教会の聖伝説の中には、同じくらい不思議なことが、たとえ語られています。あなたは若い頃は相当な罪びとでした。だから神があなたの罪を、まさにあなたを罰するための手段にして、あなたを罰したのです。けれども、神は数世紀にわたって、あなたが悔い改めるようにと、あなたを生かしてくれたではないですか。未だにあなたを、女の姿において誘惑している悪魔のことなどは、すっかり忘れてしまいなされ。悔い改めて、あなたの魂を、神に委ねなさい。そうすれば、私もあなたの罪を赦しましょう。」

「悔い改めるですって！」 死にかけている男はそう言って、彼の大きな黒い目で、司祭の顔をじっと見つめました。その両眼は、再び彼の青春の烈しい炎で燃えあがるかのようにでした。「悔い改めるですって、神父さま。わしには出来ません！ わしはあれを愛しています！ わしはあれを愛してるんです！ 死の先にもし生命があるならば、わしはいつまでも永遠に、彼女を愛しつづけます。自分の魂よりも、わしは彼女がいとしいのです。わしの魂が天国へ行く望みなどより、死んで地獄へ墮ちる恐れなどよりも、わしはずっと彼女がいとしいのです！」

司祭はひざまずき、顔をおおって、熱心に祈りました。彼が再び目を上げた時、男の魂は罪の赦しを受けないままに、この世を去っていました。しかし、死者の顔の上には、司祭が不思議に思

かへして笑っていました。こころをなやましていました。しかしその日の夜には、何れも「意識に似  
うほどの笑みが浮かんでいました。そこで、祈祷 (Miserere)を忘れて、思わず、「ついに彼女に  
出会ったのだな」と呟いていました。東の空が明るむと、魔法のような日の出の光に染まって、  
朝霧が日輪の上方に、黄金の泉となって立ちのぼっていました。

訳注：\*1.ムーア(Moor)=北西アフリカのイスラム教徒。8世紀にスペインを征服した。

\*2.ポンセ・デ・レオン(Ponce de Leon)=スペインのアメリカ大陸探検家(1460生-1521没)  
。フロリダで<若返りの泉>を探したとされる。

(翻訳者：脩海 copyright:shuh kai 2014)